

Bernard Bloch の日本語研究を支えた 日系人たち

池 田 葉採子

要 旨

言語学者 Bernard Bloch の日本語研究は、戦時下のアメリカで行われた。1942年ごろのアメリカは、多くの日本人が収容され、監禁状態にあり、日本語に関する文献もほとんど手に入らない有り様であったがために、Bloch は日本語の適切なインフォーマントを探し出すのに相当苦心したようである。そんな中、彼は日系人の日本語研究を読み、また日系人インフォーマントと共に研究を始めることになる。

本稿の目的は、Bloch の研究を支えた無名の日系人5人を取り上げ、彼らの日本語研究がどのようなものであったのかを検証することにある。彼らはこれまで全く知られることのなかった日系人たちであり、彼らの日本語研究は、歴史に埋もれたまま今日に至っている。そうした無名の日系人が、それぞれ波乱に満ちた人生を送り、たくましく異国の地で生きていたことを掘り起こすこと、そして当時のアメリカにおける日本語研究の一端を明らかにすることが本稿の意義である。

キーワード

Bernard Bloch Peter Marie Suski Joseph Koshimi Yamagiwa
Mikiso Hane Toshio Kono Henry Saburoo Tatsumi 日系人

目 次

1. はじめに
2. Bernard Bloch の日本語研究を支えた日系人（1）
 2. 1. Peter Marie Suski
 2. 2. Joseph Koshimi Yamagiwa

2. 3. Mikiso Hane

3. Bernard Bloch の日本語研究を支えた日系人 (2)

3. 1. Toshio Kono

3. 2. Henry Saburoo Tatsumi

4. おわりに

1. はじめに

アメリカの言語学者 Bernard Bloch が太平洋戦争中のアメリカで日本語研究を行い、数々の優れた日本語論及び *Spoken Japanese* (以下 SJ と略す) という日本語教科書を著したことは、既に池田 (2013, 2014) などで述べてきたとおりである。

彼の日本語研究は、日本語を母語とするインフォーマントとの対話の中で行われた。しかし1942年ごろのアメリカは「大戦勃発とともに、米国民権をもつ日本人までが収容所に入れられ、真珠湾攻撃の数時間後には日本国籍をもつ者はほぼ全員逮捕されてしまい、多くは、数ヶ月過ぎても監禁状態であったり、著しい行動制限を受けたりしていた」(Miller 1969, 小黒訳1974: 54) という有り様であったために、Bloch は適切な日本語インフォーマントを探し出すのにかなり苦心したようである。

また Bloch は日本語について書かれた「手に入る限りの文法書類は読んでいる」(Miller 1969, 小黒訳1974:55) と述べているものの、彼にとって「手に入る文献は、常に無益以外の何物でもな」(Miller 1969, 小黒訳1974: 55) だったという。さらに「極東からの図書輸入は戦時中行詰り状態を示し」(Miller 1969, 小黒訳1974: 56) ていたというのだから、非常に制限された環境下で日本語研究を行わなければならなかった Bloch の苦悩は計り知れない。そんな中、彼は日系人の研究を読み、また日系人インフォーマントと共に研究を始めることになる。

本研究の目的は、戦時下のアメリカで Bloch の研究を支えた無名の日系人を掘り起こし、彼らの日本語研究を検証し、当時のアメリカにおける日本語研究の一端を明らかにすることにある。

2. Bernard Bloch の日本語研究を支えた日系人 (1)

これまで池田 (2013) で Peter Marie Suski と Joseph Koshimi Yamagiwa、池田 (2016) で Mikiso Hane という 3 人の日系人を紹介してきた。Suski と Yamagiwa は当時のアメリカで、それぞれの立場で日本語研究を行った人物であり、Hane は実際に Bloch と共に仕事をした人物である。

2. 1. Peter Marie Suski

Peter Marie Suski は以下のような経歴を持つ日系一世である。池田 (2013) に加え、今回新たにわかった知見を含めて紹介する。

(2-1)

Dr. Suski (1875–1961; 須々木榮 Susuki Sakae in his Japanese name), a native of Okayama Prefecture and son of a samurai, came to the United States in 1898. After the 1906 earthquake that destroyed his photo studio in San Francisco, he moved to Los Angeles with his wife and two young daughters. In time, he entered USC to study medicine at the age of thirty-eight. He graduated in 1917 and began a new career as surgeon. During World War II, he spent three years at the Heart Mountain Relocation Center. Throughout his life, Suski was a regular contributor to the English section of the L.A.-based Japanese newspaper, Rafu Shimpo. He built his library of East Asian language and culture for his children and for future generations. His life came to exemplify the many turbulent challenges, opportunities, and successes experienced by other Issei during the early twentieth century.

(南カリフォルニア大学図書館のホームページ¹より)

(拙訳) Suski (1875–1961; 須々木榮 日本名はススキサカエ) は岡山県生まれの侍の息子で、1898年にアメリカに渡った。サンフランシスコで写真館をしていたが、1906年の大地震でその写真館を失うと、妻と2人の娘と共にロサンゼルスに引っ越した。Suski は38歳のとき南カリフォルニア大学で医学の勉強を始め、1917年に卒業すると外科医として新しい人生が始まったのである。第二次大戦中、彼は3年間、ハートマウンテン移住セン

ターという日系アメリカ人強制収容キャンプに収容された。彼はロサンゼルスを拠点とする日本語新聞である羅府新報によく寄稿していた。彼は東アジアの言語と文化の図書館を、彼の子供たちや将来の世代のために作った。彼の人生は、20世紀前半の日系一世たちが経験した挑戦や出世、成功を物語る好例となった。

Suski は日系人の子供たちが、日本語の動詞の活用を簡単に習得できるようになることを願って日本語の本を書いた。それが Suski (1942) である。

(2-2)

I have been observing the Japanese conversation of the American-born Japanese children, and notice that they are experiencing difficulty in verb endings. [...] There is no Japanese grammar available that is written in English, which treats of verbs extensively as to different endings in conformity with proper Japanese etiquette.

Suski (1942 : 1)

(拙訳) アメリカで生まれた日本人の子供の日本語会話を観察していて、彼らが動詞の語尾に難しさを感じているようだと言った。[中略] 日本語の作法に合致した語尾の選択に関して広汎に扱った、英語による日本語の文法書は存在しないのである。

Suski (1942) は、文法書というより、単に動詞の様々な形を羅列しただけのテキストである。例えば ‘erabu’ という動詞について、実に100を超える形が提示されている²。以下は、そのほんの一部を抜粋したものである。

(2-3)

erabu	erabanakattaroh	erabande
erabimasu	erabeba	erabamaide

eraban(ai)	erabaneba	erabanakutte
eranda	erandara(ba)	oerabinasaru
erabananda	erabanandara(ba)	oerabininaru
erabanakatta	erabohnara(ba)	oerabinasaimasu
eraboh	erabumainara(ba)	oerabininarimasu
erabumai	erabe	oerabiasobasu
erandaroh	erabuna	oerabiasobasimasu
erabanandaroh	erande	

Suski (1942 : 10-12)

日本語は、一つの動詞がこれほど多くのふるまいをするのである。その様々な形を一覧表にした Suski (1942) が戦時下のアメリカに存在していたことは、Bloch の言語資料として役立つものであったろう。

しかし、Bloch は Suski (1942) を文法書とは言えないとして酷評するのである。Suski が説明する日本語の動詞の活用は、確かに体系的であるとは言えない。そもそも Suski は言語学者ではないので、日本語の文法を正確に説明する必要もなかった。ただ、日系人の子供のためにわかりやすい本を書いたというに過ぎない。

Bloch は1942年、Suski (1942) に対する書評を書いた。その中で、Bloch は 'Dr. Suski's chaos' (拙訳：ススキ博士の混沌) (Bloch 1942 : 202) などと批判した。そして、Bloch は「日本語の規則変化動詞は、語幹の最後の音素によって分類すれば2つに分類される。子音動詞と母音動詞である」と述べた。このことは池田 (2013) で詳しく述べたとおりであるが、Bloch の日本語研究において、母音動詞、子音動詞という分類に初めて言及したのが Suski (1942) に対する書評の中であることは事実である。

しかし、歴史とは誠に皮肉なものである。こうして Bloch は母音動詞、子音動詞の分類に成功し、日本語教科書 SJ を執筆するが、SJ はその後、だれからも評価されることなく現代に至る。Suski (1942) は、Bloch に酷評されたにも関わらず、2002年に復刻版 Suski (2002) が出版されている。

2. 2. Joseph Koshimi Yamagiwa³

Joseph Koshimi Yamagiwa (1906-1968) は、日系二世で、戦時中はミシガン大学教授として ASTP (Army Specialized Training Program) の日本語教育に携わった人物である。日本名は山極越海、妻は、東條英樹の側近であった政治家星野直樹の妹、星野花子である⁴。

Yamagiwa (1942) はミシガン大学で実際に使用されていた日本語教材である。その Preface を見ると、アメリカで生まれ育った Yamagiwa だが、当時の日本国内で国語研究を牽引していた、多くの国語学者の先駆的研究に明るかったことがうかがえる。

(2-4)

This book in Modern Conversational Japanese represents the basic materials of the author's beginner's course in the Japanese language taught at the University of Michigan.

The section on pronunciation derives in large part from the introductory materials of the Kokugo hatsuon akusento jiten ("Dictionary of Accents in the Pronunciation of the National Language"), first published by Professors Kaku Jimbo and Chisato Tsunefuka in 1932. The grammatical material owes a great deal to the language philosophy of Professor Shinkichi Hashimoto.

The author has also consulted the latest works of Professors Yoshio Yamada, Daizaburo Matsushita, Kanae Sakuma, and others. From the works of the Japanese scholars and from the various Japanese-English dictionaries, especially the one by Professor Yoshitaro Takenobu, many examples have been taken.

Yamagiwa (1942 : v-vi)

(拙訳) この本は、筆者 (Yamagiwa) が担当しているミシガン大学日本語初級コースの会話教材である。発音の部分は1932年に神保格と常深千里によって出版された『国語発音アクセント辞典』から採られている。文法的な資料は橋本進吉教授の言語哲学に恩義がある。

また、筆者は山田孝雄、松下大三郎、佐久間鼎らの最新の研究についても調べている。日本の学者の研究や辞書、とりわけ武信由太郎の『武信和英大辞典』から多くの例文が取り上げられている。

Bloch (1946b) は Yamagiwa (1942) から多くの例文を引用している。Yamagiwa という日本国内での日本語研究に通じた日系人の研究は、Bloch が日本語研究を進める上で、大いに役立つものであった。そのことは Bloch (1946c : 304) が ‘Among recent works, these two contain useful material’ (拙訳: 最近の研究の中で、次の2つはとても有益な資料だった) と前置きした上で、そのうちの1つとして Yamagiwa (1942) を挙げていることから明らかである。

戦後も Yamagiwa はミシガン大学で日本語教育に従事した。1965年、Yamagiwa は *Readings in Japanese Language and Linguistics* を編集し、出版した。これは次のような内容のものであった。

(2-5)

In the present volume, one in a series of five, the student of Japanese will find reproduced a variety of texts selected with a view to making available to the Western Student a ready source of fully annotated reading materials, representing the best of contemporary scholarship in Japan. The series covers the fields of Japanese language, literature, history, political science, and sociology, respectively.

Yamagiwa (1965 : Editor's Foreword)

(拙訳) この第1巻は、5巻から成るシリーズで、日本語学習者はこれらが以前に出版された本からの抜粋だということに気が付くだろう。これらは西洋の学生が利用できるように注釈付きの読み物教材を準備するという観点から選ばれたものである。これらは全て現代の日本の学術の最前線を表している。このシリーズは、「日本語」、「文学」、「歴史」、「政治科学」、「社会学」の分野を網羅している。

アメリカで暮らす Yamagiwa が、その当時の日本国内における最新の文献を収集し、特に優れた部分を自分で抜粋し、アメリカで学ぶ学生のために惜しむことなく提供した。それは日本語だけでなく、文学、歴史、政治科学、社会学の分野に及んだ。この Yamagiwa の偉大な業績はこれまでほとんど知られていない。インターネットのなかった時代である。Yamagiwa (1965) は非常に有益な教材であったろう。例えば、「日本語」の巻では、(2-6) に引用する22冊の業績が抜粋されている。戦後とはいえ、物流が盛んでないこの時代に、アメリカで暮らす Yamagiwa がこれだけの書物を集めていたことに驚く。日系二世であった Yamagiwa が自身のアイデンティティを求めて、日本語という媒体を通して祖国の文化と一体化したいという強い願望が伝わってくる。

(2-6)

1. 時枝誠記 (1955) 「國語學」、国語學會『國語學辭典』東京堂、pp.387-389.
2. 中田祝夫、築島裕 (1956) 「國語史」、国語學會『國語學辭典』東京堂、pp.412-418.
3. 池上禎造 (1955) 「國語学史」、国語学会『國語学辞典』東京堂、pp.390-397.
4. 橋本進吉 (1950) 「國語音韻の變遷」、『橋本進吉博士著作集 4 國語音韻の研究』岩波書店、pp.52-203.
5. 有坂秀世 (1934) 「古代日本語に於ける音節結合の法則」『國語と國文學』1934年1月号。(復刻版：有坂秀世 (1957) 『國語音韻史の研究増補新版』三省堂、pp.103-116.)
6. 龜井孝 (1943) 「上代和音の舌内撥音尾と唇内撥音尾」『國語と國文學』1943年4月号、pp.25-43.
7. 金田一春彦 (1954) 「東西兩アクセントの違いが出来るまで」『文學』1954年8月号、pp.63-84.
8. 時枝誠記 (1941) 「言語の存在條件としての主體場面及び素朴」『國語

- 學原論』岩波書店、pp.38-56.
9. 橋本進吉(1948)「文と語と文節」『橋本進吉博士著作集 2 國語法研究』、岩波書店 pp.2-25.
 10. 水谷静夫(1951)「形容動詞辨」『國語と國文學』1951年5月号、pp.31-47.
 11. 石垣謙二(1955)「作用性用言反撥の法則」『國語と國文學』1955年5月号、pp.215-238.
(復刻版：『助詞の歴史的研究』岩波書店、pp.215-238.)
 12. 松尾捨治郎(1936)「國語法論攷」『終止形所屬のなり非詠嘆論』第6部第6章、文学社、pp.743-761.
 13. 大野晋(1950)「假名遣の起原について」『國語と國文學』1950年12月号、pp.1-20.
 14. 上田萬年、橋本進吉(1916)「我が國の辭書と節用集」『古本節用集の研究』東京帝國大學文科大學紀要、東京大学、pp.295-328.
 15. 築島裕(1959)「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」『國語學』第37輯、pp.35-53.
 16. 春日政治(1935)「國語資料としての訓點の位置」『國語國文』1935年12月号.
(復刻版：春日政治(1956)『古訓點の研究』風間書房、pp.1-23.)
 17. 金兒祝夫(1942)「元興寺法相宗明詮大僧都の點本に就いて」『國語國文』1942年5月号、pp.42-54.
 18. 湯澤幸吉郎(1926)「國語資料としての抄物」『國語と國文學』1926年1月号、pp.27-40.
 19. 東條操(1954)「日本方言学」『方言と方言学』吉川弘文館、pp.3-17.
 20. 国立国語研究所編(1950)「5か村の言語はいかに違うか」『八丈島の言語調査』秀英出版、pp.116-118, 129-145, 157-166.
 21. 土井忠生(1940)「吉利支丹の日本語研究」『カトリック大辞典』Vol.1、富山房.
(復刻版：土井忠(1942)「吉利支丹の日本語研究」『吉利支丹語學の研究』

靖文社、pp.1-12.)

22. 時枝誠記 (1947) 「國語問題に對する國語學の立場」『國語と國文學』
1947年2月号、pp.1-9.

Yamagiwa (1965 : Contents⁵)

2. 3. Mikiso Hane⁶

Mikiso Hane (羽根幹三⁷、1922-2003) は、実際に Bloch のインフォーマントとして活躍した日系人である。Bloch の日本語教科書 SJ の表紙には、著者の名前の下に ‘with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others’ と書かれており、Hane が SJ 作成に大きく寄与したインフォーマントであることがわかる。

Hane は次のような経歴の持ち主である。

(2-7)

Hane was born in 1922 in Hollister, California, to Japanese immigrant parents and lived there until the age of ten, when his parents sent him to Japan, where he lived with an uncle and attended school in Hiroshima.

Hane returned to the United States in 1940, and following the outbreak of war with Japan in 1941, he was interned by the United States government in a camp in Arizona from May 1942 until October 1943.

After 18 months in the internment camp, Hane applied for a position teaching Japanese at a program operated by the U.S. Army at Yale University. Following the war he earned college degrees at Yale — a bachelor’s degree in 1952, a master’s degree in 1953, and a doctoral degree in 1957 — paying his own way through college by teaching Japanese and setting type for an Asian studies journal.

[...] Hane taught a wide range of history courses at Knox — including Japanese, Chinese, Indian and Russian history, as well as the Western civilization sequence — from 1961 until his retirement in 1992.

(Knox College Website⁸ より)

(拙訳) Hane は1922年、カリフォルニアのホリスターで、日系移民の両親から生まれ、10歳の年までそこで暮らした。Hane の両親が、Hane を日本へ送り出し、Hane は広島で叔父と共に暮らし、学校に通った。

Hane は1940年にアメリカに戻ったが、1941年、日本との戦争が勃発すると、1942年5月から1943年10月まで、アメリカ政府によってアリゾナキャンプに抑留された。18カ月に及ぶ抑留生活の後、Hane はイェール大学の米軍プログラムで日本語を教える職に申し込んだ。戦後、Hane は日本語を教えたり、アジア研究ジャーナルで文字打ちをするなど働きながら大学を卒業し、1952年に学士、1953年に修士、1957年に博士の学位を取得した。

[中略] Hane はノックス大学で、1961年から退職する1992年まで、西洋文明の歴史はもちろん、日本、中国、インド、ロシアの歴史など幅広い歴史コースで教えた。

戦後、Hane は *Eastern Phoenix: Japan Since 1945* (拙訳：東の不死鳥—1945年からの日本) や、思想史家丸山眞男の『日本政治思想史研究』を翻訳した *Studies in the Intellectual History of Tokugawa Japan* (拙訳：徳川日本の思想史に関する研究) など数々の著書を執筆した。ただ残念なことに、戦後に書かれた著書の中に、Bloch や戦時中の日本語教育に関する言及は見られない。

Hane は SJ 作成の協力者として筆頭に名前が挙がっているほか、SJ のガイドのために準備されたマニュアル *Guide's Manual for Spoken Japanese: War Department Education Manual EM563* の監修を行った人物でもある。そのようなことから、SJ が出版された1945年当時若干23歳だった Hane に、Bloch が日本語話者として、一定の信用を置いていたということは言ってもいいであろう。

3. Bernard Bloch の日本語研究を支えた日系人 (2)

ここまでは、池田 (2013, 2016) でも名前を挙げてきた日系人である。

本稿では、新たに Toshio Kono と Henry Saburoo Tatsumi という 2 人の日系人について紹介する。

3. 1. Toshio Kono

Toshio Kono (高野俊郎⁹) は、2. 3. で紹介した Hane と並んで、SJ の表紙に ‘with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others’ と書かれている人物である。

彼の経歴については不明な点が多い。Miller (1969, 小黒訳1974: 63-64) は「氏はインフォーマントの 1 人として、エール大学戦時言語課程中ずっとブロックのもとで働き、Spoken Japanese に協力者として名前が見られる。氏はまた、同書に付随する毎分78回転レコード盤の吹き込み者でもある¹⁰」と述べている。

以前、池田 (2016) で SJ のレコードについて考察した際、レコードの吹き込みを行った人物として、英語が Bloch、日本語が Hane であると考えるのが自然ではないかと述べた。しかしその推測は間違いであったようだ。吹き込みを行った 2 人の人物のうち、1 人は Toshio Kono であると Miller が述べている。このことから Kono が日本語部分の収録を行い、Bloch が英語部分を収録したと考えるのが最も自然であると言えよう。しかしながら英語部分は Hane が収録したかもしれないという低い可能性をも排除することはできない。レコード収録人物の謎は依然として残ったままである。

Bloch (1946b: 200) は、‘Mr. Kono kindly checked the phrasing and accentuation of the examples used in the present paper’ (拙訳: 高野氏はこの論文で使用した例文の句切り方とアクセントを親切にチェックしてくださった) とわざわざ Kono の名前を挙げて感謝の言葉を述べている。Hane や他のインフォーマントにはそのようなことを書いていない。このことから、Bloch にとって Kono は少し特別なインフォーマントであったように感じられる。

さて、Miller によると、Kono は Yale 大学の極東出版 (Far Eastern Pub-

lications) のマネジャーであったと言う。極東出版の前身はシナ語印刷所であった。戦時中、アメリカは手に入りうる様々な日本語研究の文献を世界各地から集めようとしていたのだが、ローズ＝イネス (Arthur Rose-Innes) が編纂し、横浜で出版された和英辞書や『日本語話しことば語彙』といった書物は需要に供給が追いつかず、このシナ語印刷所で影印本¹¹が印刷されていた。そのうちの1冊を Bloch が入手していたことを Miller が明らかにしている (Miller 1969, 小黒訳1974: 56)。こういう部分でも Kono の活躍があったのかもしれない。

3. 2. Henry Saburoo Tatsumi

Bloch (1946b) は、1946年より前に、口語日本語の統語論が体系的に記述されたことは一度もないと述べている。

(3-1)

Although the syntax of colloquial Japanese has been treated in beginner's books and special articles, it has never, so far as I know, been the subject of a systematic study. Partial descriptions of Japanese sentence structure are not wanting, for the most part scattered through books chiefly concerned with other problems; but no attempt has been made to give a clear and unified account of the syntax as a whole. This paper is an effort to supply a first step toward such an account.

Bloch (1946b: 200)

(訳¹²) 口語日本語の統語法は、初学者向けの教科書や特定の論文では扱われることはあったが、私の知る限りでは、それが体系的記述の対象となったことは、今までに一度もない。日本語の文構造の局部的記述はあるにはあるが、大抵の場合、主として統語法以外の問題を取り扱った本の中に散見される程度で、統語法全体の明確かつ統一的な記述はなされたことがない。本論は、そのような記述の第一歩たるものである。

ただし、体系的記述を目指した研究が1つだけあったとして、Bloch は

Tatsumi (1936) を挙げた。だが、Tatsumi (1936) は非科学的かつ不完全なものだったという。

(3-2)

The only approach to such an attempt that I know of is Henry Saburoo Tatsumi's Simplified grammar table of the spoken Japanese (Tokyo, 1936). Tatsumi tries to exhibit the over-all structure of Japanese sentences on a single chart (approximately 31 by 40 inches); but his arrangement is impossibly cumbersome, and his analysis both inscientific and incomplete. The first sentence under the heading Syntax indicates the general approach: 'The usual word order in a Japanese sentence is as follows: (A) Subject, (B) Time, (C) Means of transportation, (D) Place, (E) Indirect Object, (F) Instrument, Means, Material or Agent, (G) Direct Object, (H) Complements, (I) Quotations, (J) Predicate verb or adjective, (K) Auxiliary suffixes.'

Bloch (1946b : 200)

(訳¹³) 私の知る唯一の例外は、Henry Saburo Tatsumi の『簡約口語日本語文法表』(東京：1936)である。同書には、試案として、日本語の文構造の全体像が、一つの表(約31×40インチ)にまとめてある。が、その配列は、非常に煩雑で、その分析も、非科学的かつ不完全である。「統語論」という表題のすぐ下に現れる最初の文が、全体的なアプローチを示しているが、それは次のようである。「日本語の普通の語順は、以下のごとし：(A) 主語 (B) 時間 (C) 交通機関 (D) 場所 (E) 間接目的語 (F) 道具、手段、材料あるいは動作主 (G) 直接目的語 (H) 補語 (I) 引用 (J) 述語動詞もしくは形容詞 (K) 助詞。」

Bloch が見たという、Henry Saburo Tatsumi の『簡約口語日本語文法表』というのは、調べたところ '*Simplified Grammar Table of the Spoken Japanese: A complete grammar condensed on one chart*' (拙訳：簡約口語日本語文法表：一つの表に凝縮された完全文法) という Tatsumi の著書のよう

である。文法書ではなく、文法表であるところが興味深く感じられる。

Henry Saburo Tatsumi¹⁴は、次のような経歴を持つ日系人である。

(3-3)

Henry Saburo Tatsumi was born in San Francisco in 1896 and received his early education in Japan. During World War I he served in the U. S. Army. In 1932 he received a bachelor's degree in Oriental Studies from the University of Washington and a master's degree in 1935. In the same year he joined the faculty of the University and taught Japanese for more than thirty years until his retirement with the rank of associate professor, emeritus, in 1967. During World War II Professor Tatsumi taught Japanese at the U. S. Navy Language School located at the University of California, Berkeley, and, later, the University of Colorado, Boulder. Many of the founding figures of Japanese studies in the United States, such as Donald Keene, Edward Seidensticker, and William Theodore De Bary, were trained in Japanese by professor Tatsumi and his colleagues.

(University of Washington のホームページ¹⁵より)

(拙訳) ヘンリー・サブロウ・タツミは1896年にサンフランシスコで生まれ、日本で教育を受けた。第一次世界大戦のとき、彼は米国軍隊に召集された。1932年、ワシントン大学で東洋研究の学士、1935年に修士を取得した。同年、大学で日本語を教え始め、名誉助教授として1967年に引退するまで続けた。第二次世界大戦のときには、カリフォルニア大学バークレー校にあった米国海軍の日本語学校で、また、その後はコロラド大学ボルダー校で日本語を教えた。ドナルド・キーンやサイデンステッカー、ウィリアム・T・ド・バリーのような日本研究の先駆者はタツミ教授やその同僚から日本語の訓練を受けた。

Bloch が見た Tatsumi の『簡約口語日本語文法表』は一体どんな表だったのだろうか。Tatsumi (1936) は残念ながら2017年8月現在、日本国内で所蔵を確認することはできない。だが、Tatsumi が1959年に著した A

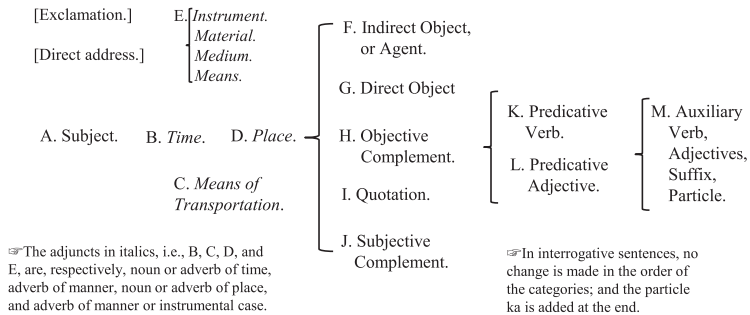
Charted Course to Spoken Japanese (構文式日本語會話法) が国内では唯一、国立国会図書館に所蔵されている。

そこには、次のような表3-1が掲載されている。

(3-4)

【表3-1】

The Order of the Categories in Japanese Sentences



Tatsumi (1959 : 27¹⁶)

この表は、さきに (3-2) で Bloch が引用した「日本語の普通の語順は、以下のごとし：(A) 主語 (B) 時間 (C) 交通機関 (D) 場所 (E) 間接目的語 (F) 道具、手段、材料あるいは動作主 (G) 直接目的語 (H) 補語 (I) 引用 (J) 述語動詞もしくは形容詞 (K) 助詞。」に非常に似ている。Bloch の引用と比べると、Tatsumi (1959) では、(E) と (F) が入れ替わっている。また (H) 補語は、Tatsumi (1959) では (H) 目的格補語と (J) 主格補語に分けられている。(J) 述語動詞もしくは形容詞は、(K) と (L) に分割されている。(K) 助詞は、Tatsumi (1959) では (M) 助動詞、接尾辞、助詞というように付け加えられた。このように若干の違いは見られるものの、コンセプトは同じである。つまり日本語の文は、(A) 主語、(B) 時間、(C) 交通機関…という順番に並べていくことで作ることができるのだという発想である。

Tatsumi (1959) は、日本語の文の構造は次のようなものと述べている。

(3-5)

The fundamental rule of Japanese syntax, or sentence structure, is that the subject is placed at the beginning and the predicate verb or adjective at the end of the sentence; and that the qualifying words precede the word they qualify. Thus the adjective, the possessive or appositive modifier, or relative clause precedes the noun or pronoun which it modifies; and the object, complement, quotation or adverb precedes the verb. The dependent clause likewise precedes the principle clause.

Tatsumi (1959 : 27)

(拙訳) 日本語の構文、または文の構造の基本的ルールは、主語が文の始めに置かれ、述語となる動詞か形容詞が文の終りに置かれる。修飾する語は、修飾される語の前に来る。従って形容詞、所有格や同格の句、関係節が名詞または代名詞の前に置かれる。目的語、補語、引用句、また副詞は動詞の前に置かれる。同様にして、従属節は主節の前に置かれる。

Tatsumi は、日本語の文には 6 タイプあると言う。

(3-6)

Type A: X moves from place to place — i.e., subject + motion verb.

Type B: X does something — i.e., subject + (object) + action verb.

Type C: X exists or remains — i.e., subject + existential verb.

Type D: X is in a certain state or condition — i.e., subject + progress verb.

Type E: X=X' — i.e., subject + subjective complement + linking verb.

Type F: X has a quality or a limit — i.e., subject + predicate adjective.

Tatsumi (1959 : 3)

(拙訳)

タイプ A : X が場所から場所へ移動 — 主語 + 移動動詞

タイプB：Xが何かをする—主語＋（目的語）＋行動動詞

タイプC：Xが存在するまたは残っている—主語＋存在動詞

タイプD：Xがある状態にある—主語＋進行形動詞

タイプE：XがX'と同じである—主語＋主語の補語＋連結動詞

タイプF：Xはある性状や範囲を持つ—主語＋述語形容詞

このうち、例えばタイプAの文を作るためには、次の表に従って、それぞれA、B、C、D、K、M-1、M-2から一つずつ選んで結合すれば文ができると言う。

(3-7)

【表3-2】

Composite Syntactical Chart for Type A Sentences

A		B		*		C		D		K	M-1	M-2
SUBJECT		TIME		ACCOMPANIMENT		MEANS of Transportation		PLACE		MAIN VERB	AUXILIARY VERB	Particle
Donata Who	ga	itu when	ni in, on	tomodati friend	to- (issyo ni) with	nani what	de by	dotira where	e, ni to	iki- go	masu do(es), will	ka?
Anata You	wa	ima now	at kara from,	sensei teacher	oturete since	basu bus	ni notte (by) riding	kotira here	kara from	ki- come	masen does(will) not	ga, keredomo but, however
		kinoo yesterday	since	seito bring(-ing)		zidoosya on, (in)		sotira there		kaeri- return	masita did, has, -ed	
Watakusi I	too, also	kyoo today	made until	student	ni-tuite along with	auto, car		atira over there	made as far as, to	ryokoo- travel	masen- desita did(has) not	kara and, so, therefore, since
		asita tomorrow		kono kata this person		kisya train	aruite (by) walking	zimusyo office		ryokoo- travel	masen- desita I think, Let's	
Itoos-san Mr. (Mrs, Miss) Ito	to- kata ga (wa,mo) a person called	tomorrow	made- ni by, not later than	this person		densya streetcar	hasitte running	gakkoo school	no- ho- go for a stroll	sanpo(s) ni iki- go for a stroll	I think, Let's	
		kesa this morning		sono kata that person		hikooki airplane		gakkoo school	o, de (obj.)-o motte-iki- wish(es) to	masumai I don't think	yo!	
		hiru noon	koro yonder person	ano kata yonder person		kisen steam-ship	tonde flying	uti, ie home, house	o, de hold ... and go, bring	tai (no desu) wish(es) to	takumai (no desu) don't want to	wa!
Sumisu-san Mr. (Mrs, Miss) Smith		konban tonight	about			hune boat		miti way, road	on, in	toori- pass(by)	nasai Imp. (Do--) nasai-masu- na Don't--	

*ACCOMPANIMENT may be placed anywhere between the categories A and K.
 † The phrase no-**ho-** is followed by the appropriate postposition, i.e., c, kara, made, o, or de.

Tatsumi (1959 : 6¹⁷)

例えば、「A：わたくしはB：きのうC：バスに乗ってD：事務所にK：
 行きM-1：ましたM-2：よ！」、「A：スミスさんという方もB：今から*：

友達とC：飛行機でD：そちらまでK：旅行しM-1：たいM-2：わ！」という具合である。ただし「*：友達と」の部分だけはAからKのうちのどこにでも入れることができるという。AからMまで主語、時間、方法など1つずつ表から選択していくことで日本語の文ができるというのは、なかなか愉快的な発想である。

当然、「A：伊藤さんがB：明日から*：あの方を連れてC：歩いてD：どちらまでK：持っていきM-1：ませんでしたM-2：か？」という非文をいくらでも産出できる。というか、むしろ正しい文を作る方が難しいようにも感じる。どう組み合わせると正しい文になるのか、どう組み合わせると非文なのか。一番肝心な説明がない。

このようにして、Tatsumi (1959) は文タイプA～文タイプFまで、1つずつこの表を作成した。Bloch (1946b) が参照したという Tatsumi (1936) 『簡約口語日本語文法表 (約31×40インチ)』は、文タイプA～文タイプFまでの6つの表を一覧にしたものであったと考えられる。

Bloch (1946b) は Tatsumi (1936) を非科学的で不完全だと述べた。確かに構文論というにはほど遠いものである。しかし (3-3) に引用したとおり、ドナルド・キーンやサイデンステッカーが Tatsumi から日本語指導を受けたという。彼らもこの表で日本語を勉強したのだろうか。

4. おわりに

本稿では Bloch の日本語研究を支えた、5人の日系人を考察してきた。彼らはこれまでほとんど知られることのなかった日系人である。このうち、Hane と Kono は Bloch のインフォーマントとして、Bloch と共に日本語研究を行い、レコードの吹き込み作業など直接的に Bloch を手助けしてきた人物である。Yamagiwa、Suski、Tatsumi は、おそらく Bloch と面識はなかったものの、戦時中のアメリカで、それぞれの立場から真剣に日本語に向き合い、日本語の研究を行ってきた人物である。Suski と Tatsumi の研究を Bloch は酷評したが、日本語話者や日本語資料が極めて制限されていた当時のアメリカに Suski (1942) と Tatsumi (1936) が存在していたこ

とは、少なくとも Bloch の日本語研究の一助となったように思う。こうした無名の日系人が、それぞれ波乱に満ちた人生を送り、たくましく異国の地で生きていたことを掘り起こし、また当時のアメリカでこのようにさまざまな日本語研究が行われていたことを明らかにできたことは、本研究の意義であると考えている。

さて、日系人ではないのだが、Bloch の日本語研究を支えた人物として Gerge A. Kennedy (1901-1960) という人物がいる。彼は Bloch の論文の中でよく謝辞と共に登場する。Kennedy は中国名を金守拙といい宣教師の両親を持つ。中国浙江省で生まれた後、1918年に渡米した。戦時中は Yale 大学で、日本語と中国語を教えたという¹⁸。Miller (1969, 小黒訳1974: 53) によれば、Kennedy はシナ語¹⁹ 研究で大きな功績を挙げ、Yale 大学の初期の日本語研究においても大きな役割を果たしたと言う。Kennedy とシナ語出版所との関係など、どういう部分で Bloch の日本語研究に影響を与えたのか、今後研究を続けていきたい。

注

- 1 <http://libguides.usc.edu/c.php?g=234962&p=1561943> (2017年8月11日アクセス)。
- 2 ほかに oerabiasobasimasendesitara(ba) といったものまで見られる。
- 3 Yamagiwa については、池田 (2013) に加え新たにわかった知見を含め、まとめ直したものである。
- 4 この経歴は Yamagiwa の義父である星野光多を紹介するホームページを参照した。 http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/H/hoshino_mi.html (2017年8月11日アクセス)。
- 5 (2-6) は Contents をもとに筆者がまとめ直したものである。実際には次のように書かれている。さらに驚くべきことに日本語部分は全て手書きである。フォントが入力できなかつたのであろう。

1 Tokieda Motoki 時枝誠記, “Kokugogaku 國語學 (Japanese language studies),” in Kokugo Gakkai 國語學會 (Society for Japanese Language Studies), Kokugogaku jiten 國語學辭典 (Dictionary of Japanese language studies), Tookyoo, Tookyoodoo, 1955, pp.387-389.

- 6 Hane については、池田 (2016) をもとに再度まとめ直したものである。
- 7 Mikiso Hane の漢字表記は、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス (Web NDL Authorities) に記載されているものである。
- 8 http://departments.knox.edu/newsarchive/news_events/2003/x6196.html (2017年8月11日アクセス)。
- 9 Toshio Kono の漢字は Miller (1969, 小黒訳1974: 63) より引用。
- 10 原文のまま。
- 11 海賊版のこと。
- 12 この訳は、ミラー編林訳 (1975: 25) より引用。
- 13 この訳は、ミラー編林訳 (1975: 25) より引用。
- 14 Henry Saburo Tatsumi の漢字表記は不明である。
- 15 <https://asian.washington.edu/awards-honors> (2017年8月11日アクセス)。
- 16 この表は、Tatsumi (1959: 27) をもとに、筆者が忠実に再現したものである。
- 17 この表は、Tatsumi (1959: 6) をもとに、筆者が忠実に再現したものである。
- 18 Kennedy の略歴は、<https://www.umass.edu/wsp/resources/profiles/kennedy.html> (2017年8月11日アクセス) を参照した。
- 19 「シナ語」は、Miller (1969, 小黒訳1974: 53) の言葉をそのまま引用した。

参考文献

- Bloch, B. (1942) "Review of Conjugation of Japanese Verbs, by P. M. Suski." *Journal of the American Oriental Society* 62, pp. 202-204.
- Bloch, B. (1946a) "Studies in Colloquial Japanese: I. Inflection." *Journal of the American Oriental Society* 66, pp. 97-109.
- Bloch, B. (1946b) "Studies in Colloquial Japanese: II. Syntax." *Language* 22, pp. 200-248.
- Bloch, B. (1946c) "Studies in Colloquial Japanese: III. Derivation of inflected words." *Journal of the American Oriental Society* 66, pp. 304-315.
- Bloch, B. & Jorden, E. H. with the collaboration of Mikiso Hane, Toshio Kono, and others (1945a) *Spoken Japanese Basic Course Units 1-12* (War Department Education Manual EM 561), published for the United States Armed Forces Institute by the Linguistic Society of America and the Intensive.
- Hane, M. (1996) *Eastern Phoenix: Japan Since 1945*. Boulder: Westview Press.
- Maruyama, M., translated by Hane, M. (1974) *Studies in the Intellectual History of Tokugawa*

- gawa Japan*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Miller, Roy. A. (1969) *Bernard Bloch on Japanese*, New York: Yale University Press.
(ミラー著 小黒昌一訳 (1974) 「バーナード・ブロックと日本語研究 (上)」『言語』第22号、大修館書店、pp.52-65。)
- Suski, P. M. (1942) *Conjugation of Japanese Verbs*. South Pasadena: P. D. and Ione Perkins.
- Suski, P. M. (2002) *Japanese Verbs Super Review*. New Jersey: Research & Education Association, Reprinted Edition of Suski (1942)
- Tatsumi, H. S. (1936) *Simplified Grammar Table of the Spoken Japanese : A complete grammar condensed on one chart*. Tokyo: Unknown.
- Tatsumi, H. S. (1959) *A Charted Course to Spoken Japanese: A Self-Interpreter* 構文式日本語會話法. Washington: University Book Store. (国立国会図書館所蔵)
- Yamagiwa, J. K. (1942) *Modern Conversational Japanese*. New York and London: McGraw-Hill Book Company.
- Yamagiwa, J. K. (1965) *Readings in Japanese Language and Linguistics Part I. Selections*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- 池田菜採子 (2013) 「B. Bloch の活用論の成立—影響を与えた先駆者たち—」『金城学院大学論集』人文科学編 第9巻第2号、金城学院大学、pp.170-201。
- 池田菜採子 (2014) 「Bernard Bloch の *Spoken Japanese* に関する研究—その成立の時代的背景—」『金城学院大学論集』人文科学編 第11巻第1号、金城学院大学、pp.154-192。
- 池田菜採子 (2016) 「バーナード・ブロックの *Spoken Japanese* 付属レコードに関する研究」『日本研究』第52集、国際日本文化研究センター、pp.101-135。
- ミラー・ロイ・アンドリュウ編、林栄一監訳 (1975) 『ブロック日本語論考』研究社。

Web Site

- ・南カリフォルニア大学図書館のホームページ：
<http://libguides.usc.edu/c.php?g=234962&p=1561943> (2017年8月11日アクセス)
- ・Yamagiwa の義父、星野光多を紹介するホームページ：
http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/H/hoshino_mi.html
(2017年8月11日アクセス)
- ・Knox College Website：
http://departments.knox.edu/newsarchive/news_events/2003/x6196.html

(2017年 8 月11日 アクセス)

- ・ University of Washington のホームページ :

<https://asian.washington.edu/awards-honors> (2017年 8 月11日 アクセス)

- ・ George A. Kennedy の略歴 :

<https://www.umass.edu/wsp/resources/profiles/kennedy.html>

(2017年 8 月11日 アクセス)

(いけだ なつこ・非常勤講師)

